

大造り物が出来るまで③

骨組み

大きいものになると高さ5m、重さ2トン近くにもなるので、基本となる骨格作りは最も気を遣う工程です。パソコンを使わずとも、材木を組み合わせる角度や強度を永年のカンと経験で頭の中で計算しながら組み上げていきます。最近では電動工具なども活用し、複雑な形状も作ることができるようになりました。出来上がってしまうと見ることでできない骨組みも、大造り物の魅力のひとつです。



矢部高校では、部材の寸法や角度を計測しながら制作。



さまざまな曲線も、自在に編み出します。



まるで伝統工芸の竹細工を想わせる見事な形状。どれほどの手間と技が注がれていることか。



大造り物は顔が最も重要な部分の一つ。骨組みで基礎が決まります。



設計図が無くとも出来上がりを想像しながら、基本形を仕上げていきます。



中心に直径の太い角材。その周りを小径木や竹で覆います。



出来上がった骨組みには下地が貼られ、肉付けへと進みます。

大造り物が出来るまで④

下地づくり

骨組みが出来上がったら、次は下地を貼っていきます。大造り物は自然の材料を差し込んだり、巻いたり、カットして貼ったりしながら仕上げをしていきますが、その仕上げを行うには下地を作る必要があります。紙や麻布、シュロ紐、ベニア板、金網などを駆使しながら骨組みの形状に合わせて作っていきます。この作業も出来を左右する大切な工程です。



下地にも自然の素材を使い、ほれほれするほどの完成度。



紙を貼っただけでなく、その上に麻布を巻いて下地ができます。



巨大な手。骨組みに、まずシュロの皮を貼り、その上から形状に合わせて金網を貼ります。



球体の骨組みに沿って、薄いベニア板を細く切って貼り付けることで下地も球体に。



こちらも手の込んだ下地。ベニア、金網、そして紙の三層構造。



紙を貼り付けていくことで、強度も増します。



小さな竹の部材を根気よく貼って曲面を作ります。



柔らかい金網は骨組みの形状に沿って加工ができるので重宝されます。